

研究成果報告書

所属 華中師範大学外国語学院日本語専攻

役職 副主任

氏名 尹仙花

研究結果

「価値共創型の中日翻訳授業」実践研究：その有効性及び問題点は何か

本研究では、大学日本語教育を対象に、価値共創型学習事例を分析し、その有効性について調査する。「価値共創型学習」とは、筆者らが実践してきた、教員、学生、ティーチングアシスタント（TAと略）の3者が協力して、授業を通じて「価値を共に創造し、価値共創を目指す」授業モデルである。

研究対象者は、日本語専攻翻訳授業を履修した学部3年40名で、TAは翻訳コース大学院生10名であった。対象者はABクラスに分かれ、従来型と価値共創型授業を受けた。学習内容は「文学、文化、論文、挨拶文の翻訳」である。Aは翻訳テクニックを勉強し、事例を検討し、練習を行い、訳文の指導を受ける。Bは目標を決め、①課題に関する理論を勉強し、②TAと一緒に課題を準備し、③準備を基に社会実践を行い、④教員がまとめる。

対面授業（①④授業全体の2/4）、オンライン授業（②1/4）、社会実践（③1/4）三つの授業形式を予定したが、コロナの影響で、すべてオンライン授業になった。計画通りに授業を完成し、研究を進めるために、オンデマンド型とライブ型のオンライン形式で行った。①④はライブ型、②はオンデマンド型で行ったが、一番の難点は③であった。学会通訳、観光地案内などの社会実践がキャンセルされたため、オンラインで価値共創が実行できる学会ライブ通訳、翻訳コンテスト参加などに変更した。

価値共創型学習の有効性は学習成果と授業評価から分析した。学部生の学習成果はペーパーテスト、パフォーマンス評価、ポートフォリオ評価の方法を用いて、「知識・技能」「思考・判断・表現」を評価した。その結果、学習成果において、両クラスに大きな差は見られなかった。TAの学習成果は訳文添削の成績で測定した。その結果、平均成績が低く、日本語文法の改善があまり見られなかった。

授業評価はアンケートの方法を利用して、満足度評価と協同体験評価を調査した。学部生の満足度評価は、目標設定、知的関心、知識技能の取得、授業方法などの項目で価値共創型学習のほうが高かった。また、学部生の協同体験評価においては、価値共創型学習により、共同作業に対する認識が高まり、個人志向が低下していることが確認できた。

TAの授業評価はアンケート方法で、満足度評価を調査した。知的関心、主体的学習意欲の項目で評価が高く、キャリアプランの形成に積極的な影響があることが確認できた。

価値共創型学習は授業満足度、学習意欲、社会人基礎力、キャリアプランの形成で効果が期待できる。しかし、学部生とTA共に課題完成の負担が大きいという不満があり、また、学習指導に多くの人員を必要とするなどいくつかの課題が残されている。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

「価値共創型授業の教育実践について」、尹仙花、第40回人民中国日本語名講座、2021年6月4日、北京

「ICTを活用した反転授業の教育実践」、尹仙花、2021年度東アジア比較文化国際会議日本支部大会、2021年6月19日、東京

「日本文学を教材とする日本語教育の実践」、尹仙花、第13回「東西文化の融合」国際シンポジウム、2021年11月20日、東京

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)